

・.。・・・.。・・*・.。・・*

◆◆ 特別書き下ろし短編 ◆◆

「二人のその後 ～探偵会社アールズ～」(作：秋乃みのり)

・.。・・・.。・・*・.。・・*

「スイレン先輩！ごちになりましたぁ♡」

暖簾をくぐるなり、踵をくるりと翻して後輩は言った。明るい赤髪が、雅な灯籠の明かりに照らされて艶を放つ。すっかりと空腹は満たされ、アルコールの影響かその頬はほのかに赤い。

「こちらこそ、リコが言ったとおりのいいお店だったよ。また何かの機会に来よう」
「はいっ！」

一仕事を終えたあとに、彼女と食べるご飯は至福のひとつだ。

赤星 梨々恋——『リコ』の嬉しそうな表情を見れば、仕事の疲れなど簡単に吹き飛んでしまう。

なにより、互いに抱えている仕事（ヤマ）は多いにも関わらず、こうして私と居る時間を捻出しようとしてくれる。その事実が単純に嬉しい。

「センパイ、行きましょ～♡」

「ああ」

にっこりと笑むリコが手を差し出し、何かを待つような仕草をする。私はごく自然にその手を取ると、二人で手を繋いで歩道を歩き始めた。

私達はある『事件』に遭遇して以来、よりその仲を深めていった。親友であり仕事上のパートナー、それが表向きの関係だ。だが実際は、あるご主人様に身も心も捧げたいやらしい牝同士で、彼の組織に忠誠を誓う性処理奴隷仲間だが……これは二人だけの秘密だ。

彼女は組織が管理する個体識別番号『30 番』であり、『29 番』である私とは、時折こうして恋人のように出掛けることにしている。警察に追われる身である組織を守るため、情報収集と気晴らしを兼ねたデートだ。時折ぎゅっ、と力を入れて握ってくる手を同じリズムで握り返すと、『30 番』は嬉しそうにはにかんだ。

「……そう言えば、先日は丸一日留守を任せて済まなかった。助かったよ」

「いえいえ！それは全然構わないんですけど……アレ、どうだったんですか？」

「いつものケースだよ。つきまといと無言電話……まあ、犯人は酷く臆病だったし、職場に露見すればタダでは済まない。あれより先は弁護士の範疇だが、解決も近いだろう」

「そうなんですねえ、ふうん……」

雑踏の中、私達は小声で会話する。外で仕事の話をするのは、思わぬ形で情報が漏れてしまうこともある。だが、これくらいであれば許容範囲内だろう。どこか投げやりな様子で返事をする彼女に、私は思わず苦笑した。

「どうした？」

「いえ、別に……ただ、全然クライアントに共感できないなあって思っただけです」

「フフ……そうだな。私達にとっては、よくわからない価値観だ」

私達は以前、ご主人様によって洗脳していただいた。

正義・司法・道徳……私達を縛る古ぼけた価値観を塗り替え、思考を根こそぎ反転させる洗脳ウイルス。男性絶対優位の社会を作り、男性に支配されることを無条件に受け入れる『牝奴隷化ウイルス』によって、私達の思考はすっかり支配されている。

そのおかげもあって、男性がするあらゆる行為に対して忌避感を抱く事ができないのだ。女は男性を性的に満たす義務があるし、男性の性処理に使われてこそその牝の身体だと、頭に『常識』として焼き付けられている。私もリコも組織が掲げるその素晴らしい理念に心から賛同しているのだが、世間では《悪の囊》が目の敵のように扱われるのだから、ままならない。

やはり、もっと多くの女を洗脳して、私達のような牝を一匹でも多くつくらなければ。世界中の女が悪の囊の教義に従い、男性にとっての理想郷を実現する。果てない野望のようにも思えるが、私にはリコという心強い相棒もいる。決して不可能ではないだろう。

「……リコ」

「はい♡ それじゃあ帰りましょう♪ 私達のお家に♡」

とりとめもない話に華を咲かせながら、私達は人影のまばらな方角へと夜道を歩いていった。

「ご主人様、個体識別番号『30 番』、ただいま戻りましたぁ♪」

「ご主人様、おなじく個体識別番号『29 番』、ただいま戻りました」

『家』——それは、私達にとって特別な場所だ。

女が本来あるべき姿へ戻ることを許され、心から落ち着ける安息の空間——『人間』が『一匹の牝』へと堕ちていける場所。

何かにせき立てられるように、玄関の鍵をかけるや否や全ての衣服を脱ぎ捨てる。洒落たコートも、お気に入りのインナーも、ここではチリ紙ほどの価値もない。これから起こることの方がはるかに大切で、頭の中はとっくに煩悩で支配されていた。

隣では、てきぱきとシャツブラウスを脱ぎ、爆乳を晒した『30 番』がオナニーを始める。乳首をねじり上げ、胸を下から持ち上げて自らその先端の薄桃色を舐めしゃぶる。どうやら少し出遅れてしまったらしい。私も急いで生まれたままの姿になると、その場で四股を踏むような体勢を取った。

「29 番、オナニーを開始します！今日はガニ股腰振りオナニーで、ご主人様への忠誠をお見せします……んっ♡」

「30 番、もおっ……んくっ♡ もうオナニーして、まあす……はうっ♡ スケベ乳のメス牛オナホがあ……おまんこいじってイクので、見てくださあい……あはっ♡」

玄関にはいくつも防犯カメラが設置されており、私達の痴態は余すことなく記録される。モニターの向こう側にいらっしゃるご主人様にお楽しみいただくため、しっかりとおまんこで気持ちよくならないと。勃起乳首、パイパンまんこ、いつでも使えるよう綺麗にしているアナルも隠さず、全身で男性への忠誠を見せつける。

先にイッたのは、私の方だった。ご主人様を想いながらオナニーをするだけで、私はたとえ人が近くにしようともすぐにオーガズムを得られる体質になった。やはり、女はおまんこの生き物だ。二十秒ほど遅れて絶頂した 30 番は、いやらしい匂いをぷんぷんとさせながら、用意されたバケツに潮を噴いていた。

「はぁ……はぁっ……ご主人様……っ♡」

「楽しんで……いただけましたか……？♡」

ひとしきり激しい自慰を披露して、ようやく私達は正装へ着替える。悪の囊の一員であることを示す、例のラバースーツだ。私が青色の、リコがやや光沢のある赤色のゴム製スーツを、素肌の上にまとっていく。ぎち、というラテックス特有の音がする度に、身体の凹凸が強調されてしまう。

やはりいつ見てもドスケベすぎる。男性に楽しんでもらうためだけにあるような、ボディコンシャスな衣装。乳首の辺りは意図的に薄めの素材で出来ているせいで、乳首もくっきり見えてしまっている。

リコに至っては、最近ますますおっぱいが大きくなってしまったらしく、スーツの新調も予定しているという。まったく、性処理奴隷として優秀な後輩が羨ましい。

胸には組織のエンブレムが踊り、下腹部と左肩にはそれぞれ淫紋と個体識別番号が鈍く光を放つ。

太もも、お尻、腰、背中、そしておっぱいが窮屈にゴムの中に押し込められ、やがてぴたりと収まる。

「リコ、今日もお願いしていいかな……♡」

「はい♡ じゃあ先輩のおまんこのファスナー、上げてあげるの腰を突き出してください♡」

スーツを着たままいつでもご主人様にハメていただけるよう、股からお尻にかけて走るファスナーを後輩にとじてもらえば完成……姿見には、立派な組織の作業員兼性処理専用ちんぼケースが二つ、映っていた。

「えへへ……今日はスイレン先輩にオナイキ競走負けちゃいました……♡ 先輩ってば、お外にいる間もずっと興奮して、いやらしい匂いをさせてましたもんね♡」

「もう……リコだって同じだろう？男性に襲って欲しそうに発情した匂いをさせていたこと、知ってるからな」

小声で煽り立ててくる後輩を半目で睨み返し、私達はセンサー式のライトに導かれて、奥へと進む。遺棄された工場とは思えないほど近代的な設備の廊下の先——突き当たりには、銃弾をも防ぐ重厚な扉が鎮座する。かつての私達のように、ご主人様を襲撃しようとする愚か者に対応するための、防犯扉だ。

生体認証、パスコードロック、そして監視カメラを通じた目視認証……組織の一員ではない者が通れないよう、厳重に守られた鉄壁の向こうに、いつも彼はいらっしゃる。

（あああ……ご主人様、ご主人様、ご主人様……っ♡）

はたして、扉を潜り抜けたその先。ベッドに腰掛けている、その御方。組織を束ねる最高司令官、教祖様、あるいは……呼び方に大きな意味はない。だが、私達「性奴隷隊（ちんぼケース）」にとっては自分の命よりもはるかに大切な御方で、私達は

彼の為なら人間性も、尊厳も、あらゆる自分の持つ物を捨てても従うことを誓っている。

彼の意のままに振る舞い、彼のご命令を何よりも優先する。それこそ私——宝水蓮の生きる意味だ。きつとりコも同じことを思ってくれているだろう。

「ご主人様。——はい、本日はクライアントを事務所に連れ込み、洗脳することに成功しました」

「ご主人様ご希望の、生化研のメスまんこだよ～♡ 可愛いし頭もいいし、社長の娘だし、ご主人様の研究によろこんで協力するって！」

「ですが、これで今組織が持っていた洗脳ウイルスは全て使用しました。ご主人様のおっしゃる通り、社会的影響力を持つ女ばかり効率的に狙ってきましたが、次のウイルスが完成するまで、しばらくは息を潜めた方がよろしいかと……」

「大丈夫だよ！アールズに新しく入った子達は全員洗脳済みだし、警察に送り込んだ逆スパイからも、ここが気付かれることは暫くないだろう、って♡」

最初期に組織に洗脳された多くの女は、私達のような特殊な職に就かない、ごく普通の性奴隷候補ばかりだ。

だが、『21 番』以降は大きくなりつつある組織を運営するために、技能を持った牝を多く採用している。警察官や政治家、資産家の娘、企業診断士、秘書、あるいは私達のような『正義を陰で支える武力を持った女』もその中には含まれる。

ご主人様の崇高な理念をより一層社会に浸透させるためには、洗脳ウイルスの量産体制をいち早く築き、社会に能動的にばら撒く必要がある。

洗脳ウイルスによって支配された女達がある日一斉に名乗り出て、社会を混乱させる。肝心の警察や事態を收拾するべき政治家達もそれに乗じて、悪の囊への賛同を表明——我々を止めるところか、活動に加担し、さらなる混沌をもたらす。反対する人間は、私達エージェントが『勧誘』もしくは『駆除』し、組織の支配下に置く。想像するだけでも心が躍る、最高の景色だ。

正義などというくだらない教育に操られ、性欲を蔑ろにするこの国に、男女が本来あるべき姿を取り戻させる。私達は男性に支配され、男性に付き従うことで幸せを得られる。これこそ正しい姿だとご主人様は仰っているし、実際、私もその通りだと思う。

「それでは、ご主人様。そろそろご奉仕に移らせていただいて宜しいでしょうか。もう、その……準備は出来ておりますので……」

「今日は、スイレン先輩……29 番の方が先にイッちゃったから、あたしは後で犯してねっ♡ もちろん、このドスケバラバースーツのおまんこファスナーを下げて、ご主人様に犯されるのを想像しながらオナニーして待ってるから♡」

にやりと口角を持ち上げたご主人様の前で、二人でタイミングを合わせてファスナーを下ろしていく。先ほど気持ちよくなったあとがべったりと残った「そこ」は、すっかり潤んで透明な液体を吐き出している。

「宣言……ですか？はい、もちろんです！『探偵会社アールズ、代表エージェント『スイレン』、悪の囊とご主人様に心からの忠誠を誓います！女のあるべき姿に戻し、男性絶対優位の社会を実現するべく、すべてを組織に捧げます！」

ご主人様のご命令に従い、私は即座に敬礼し、組織の一員としての忠誠を口にした。この言葉を口にするだけで、心がすっとするから不思議だ。やはり、女はもともとそういう生き物だったのだと自覚せずにはいられない。

「はい！今朝はご主人様に朝イチ濃厚ザーメンをお口でいただいたあと、30 番と二人で犯しあってから出勤しました。アールズで働かせている 43 番、44 番、45 番には事務所でどすけベセックストレニングをするように命じていたため、全員、乳首とクリトリスが腫れぼったくなっていました！」

「それだけじゃないですよ～ご主人様♡ 29 番……スイレン先輩が三人を洗脳したお祝いを兼ねて、五人でご主人様へのお祝いの Hentai ビデオを録ろうってなったの！クライアントが来る前に、事務所のソファでおっぱいでビンタしあったり、身体をこすりつけ合ったりして、みんなで組織への忠誠の言葉を言ったの♡ ねえねえご主人様？ 今度、アールズで働くコを集めてご主人様にご奉仕してもいい？♡」

「性奉仕研修はアールズの職員として私が指導していますが、そろそろ彼女達もご主人様用ちんぼケースになる準備が出来たかと。初級パイズリ研修、尻コキ・騎乗位マナー、それからソーププレイ中級研修まですべて修了させました」

洗脳ウイルスのおかげで、彼女達もすっかりご主人様へのご奉仕に心躍らせている。いやらしい牝の自覚が出来てきた証拠だ。

常に組織のことを考え、ご主人様にご奉仕することを第一に動く、探偵会社アールズの規則をきちんと理解してくれる素晴らしい子達で会社の代表としてとても誇らしい。

「ご主人様は素晴らしい御方です。私達のような牝を本当の姿に戻して下さっただけではなく、洗脳装置まで貸し出してくださるなんて……。ご主人様のご期待に応えられるよう、この乳首が浮き出たおっぱいと、ゴムの下で濡れ濡れになったおまんこ、性処理ごっくん口オナホで、本日もご奉仕いたします」

「がんばってね、先輩！あたしはご主人様のおっぱい枕になるから、後ろに行くね♡」

剥き出しになった男性器。女を犯すために存在するご主人様のペニス。私に牝としての存在意義を教えてくださいましたおちんぽ。私は自身の髪の毛をそっと耳の裏にかけてから、躊躇なくそれを頬張った。

「んっ、ぶっ、ぶぐっ、んんっ、ぢゅ、ぢゅる、ぢゅぞっ」

「あはっ♡ やっぱ先輩えっちすぎ〜♡ でも仕方ないよね、今日だってずっと、車の中ではご主人様のおちんぽしゃぶりしたい、おちんぽ舐めたい、って欲望ダダ漏れだったもん♡」

いつものように、リコ——30 番は、ご主人様の耳元で私のことを告げ口する。昔の私であれば窘めたかも知れないが、今の私は人間ではなく、ご主人様の性奴隷隊の一つでしかないのだから仕方ない。むしろ、そんなくらのことで男性に気持ちよくなっていただけなのなら、いくらでもしてくれて構わない。

「ねえ、ど〜お？ご主人様？こんなに綺麗で、お肌もスベスベで、髪もつやつやなスイレン先輩が、ひょっとこ顔でちんぽ限界まで頬張ってるの♡ じゅぶじゅぶー、ぢゅるぢゅるってエロい音立てて、大好物のちんぽしゃぶりしてるんだよ♡ もー、ガッカリだなあ。スイレン先輩はあたしの憧れの先輩で、とっても強くて、頼りになるエージェントだったのに、今ではすっかりご主人様のちんぽケースになっちゃったなんて……♡」

リコの顔に嗜虐的な笑みが浮かぶ。その容赦ない言葉の羅列に、私のフェラチオご奉仕にも一層熱が入る。

「先輩の舌があ、ご主人様のちんぽに巻き付いて、カリも全部こそぎ取ってるの、わかるよね……♡ アジトの外に出たら澄ました顔してる先輩が、とろけた表情でご主人様のちんぽぺろぺろしてるなんて、誰も知らないの♡ ザーメン飲みたい、ザーメン食べたい、ご主人様のイケメン孕ませ子種汁、ごっくんしたいって必死なイラマご奉仕……♡ えへへ、ご主人様精液上がってきた？♡」

ああ、飲みたい、お口いっぱい精液吐き出してください、ご主人様。スイレンの身体は、ご主人様のものです。ドスケベヘンタイフェラをするために生まれたんです。だから、どうぞ気軽に、トイレでおしっこをするような気軽さで、私のお口に白い精液を吐き出してください。

「ほーら、出せ出せ♡ ご主人様のちんぽケースになった 29 番の口オナホに精液びゅるびゅる出しちゃえ。ガマンなんてムダ、出したくなったらすぐに特濃ザーメン出して、牝奴隷

のお口汚しちゃえ〜♡ 頭書き換えられたドスケベクソ雑魚エージェントに遠慮なんていないの♡ ほおら出る、出る出る、イク、イク、イク……っ！！♡ ……びゅるびゅる、どぴゅどぴゅー……♡ あはっ、あははっ♡」

「んんんっ！！？ ん、んぶ、んぐっ、ん、んく……ごくっ」

ご主人様のおちんぽから、むせかえるほど濃いものが噴射する。喉に絡みつくなばつきと、鼻に抜ける匂いが、私の心を満たしていく。やっぱり、これがなくては。女が本来あるべき姿に戻った私の自尊心が、吐き出された精子を残さず胃袋へと送り届けていく。

「ん、ん、……はあ……♡ はあ……っ♡ ごちそうさまでした……っ♡ 流石はご主人様の精液です。朝も飲ませていただいたのに、今もとても濃いまです♡ このスイレンは、未来永劫、ご主人様の性処理奴隷です……いつでも使いたい時にはお呼び付けください」

「もちろん、あたしも、ずー……っご主人様の精液便所だよ！いっぱいえっちして、いっぱい気持ちよくしてあげるから……これからはずっと、あたしのこと、使ってくださいね！♡」

口の端に垂れた精液も指で拭き取り、しっかりとねぶる。他に例えることができない、精液独特の匂いと味が私を満たしていく。

「あ、あの……できればこちらにも、ご主人様の精子をいただけますか？見ての通り、もういつでもちんぽをぶち込まれる準備はできております…♡」

「え〜ダメだよ〜スイレン先輩！ご主人様が射精したら交代する約束でしょ！次はあたしのご主人様のおちんぽハメハメしてもらうんだから！」

「む……す、すまない。こんなことで取り合うのはよくないな。失礼いたしました、ご主人様……♡」

額を床に擦りつけて礼を述べ、生涯の服従と性奉仕を誓う。

ああ、やはりこの幸せをもっと多くの女に広めなければ。悪の囊の活動に誘い、女としての幸せを教えてあげなければ。

幸福はここにある。普通に生きていれば絶対に得られることのない、たしかな幸せが。

「本日も、探偵会社アールズをご用命いただき、ありがとうございます。それでは続いて、同じく洗脳クソ雑魚エージェントのリコがご奉仕いたしますので、どうか最後までお楽しみください、ね……♡」

<終>